

〈訳注〉

ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著
『ポルトガル人の状況に関するジハード
戦士の贈り物』 訳注（6）

谷 口 淳 一

第4章 フランクのマラバルへの到来と彼らの醜悪な行為の一部（承前）

[55 (157)]

第5節 チャリヤムにおけるフランクの城塞建設、ザモリンと彼らの
2度目の和平

それは以下の通りである。フランクの有力者の一人が、狡猾に欺きつづザモリン (al-Sāmri) に許可を求め、和平〔締結〕の名目で陸路コーチン (Kaṣī) を出発した。彼はきわめて狡猾で抜け目なく策略に長けており、ザモリンとの〔1回目の〕和平の期間にムスリムの有力商人の一部と知己を得て、関係を保っていたのである。彼はボンナニ¹⁾に到来し、さらにタヌル²⁾の支配者の許へ行き、その許に留まった。そしてついに、タヌルの支配者は、彼とザモリンの間に和平を成立させた。

カリカットの城塞を征服したザモリンは、軟弱で知性が乏しく、アルコール類の飲用を常としていた。一方、彼の兄弟ナンビヤール³⁾は、彼が没したのちザモリンの王国を支配するのであるが、逞しく、[56 (156)] 勇気と野心の持ち主で、彼らの間の古くからの慣習に従ってザモリンに従順にいるということではなかった。

* 本稿は『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』第4章第5節～第10節 [Tuhfa/L: 55-64] の日本語訳注である。原典と著者、訳注作成の方針などについては、「ジハード戦士の贈り物(1)」および「谷口2012」を参照されたい。本稿の諸事件については、Logan 1887 [pp. 329-331] に概要が記されている。

1) Fannān (Ponnani). カリカットの南60kmに位置する港市。Cf. Logan 1887: 77.

2) Tānūr (Tanur). カリカットの南40kmに位置する港市。Cf. Logan 1887: 77.

3) Nanbiyādar.

さて、上記のことゆえに、タヌルの支配者とザモリン、そして両者と同意した者は、このザモリンの後に支配する者を苦勞させる事態を引き起こした。それは、フランクによるチャリヤム⁴⁾での城塞建設である。そこは、ザモリンと彼の軍団、その他の旅行者の交通路であり、城塞建設によって、カリカットからアラブの地への旅が妨げられることになるのだ。カリカットとチャリヤムの間は2ファルサフ⁵⁾もないのである。ザモリンはチャリヤムの支配者が同意した後に、そこに城塞を建設することをフランクに許可した。

そこで、フランクは、完全に準備を整え、城塞建築の道具を積み込んで、大きな船でチャリヤムに到来した。〔9〕38年4月末日⁶⁾、彼らはチャリヤム川へ入り、そこに完全に防備を固めた城塞を築いた。また彼らは、前述のごとくマラバルにイスラームが入って来た当初に建てられた古いジャーミイを別の二つのマスジドとともに破壊し、そこに使われていた石材で城塞と教会を建てたのである。

城塞の建築中に、あるフランク人が前述のジャーミイの石材を一つ奪った。そこで、チャリヤムのムスリムたちは、フランクの長(kabīrhum)にそのことについて苦情を申し立てた。すると、彼はみずから一団の者たちを率い石材と石灰を運んできて、石灰で石材を固定してその箇所を修復した。ムスリムたちはこれに喜び、感謝しつつ帰っていった。

その翌日、フランクが大勢でやって来てこのジャーミイ全体を破壊し、一つの石材すら残さなかった。〔57 (155)〕そこで、ムスリムたちはフランクの長に苦情を申し立てた。すると彼は、「おまえたちの国(balad)の支配者があのマスジドとその敷地を我々に売却したのだ」と答えた。彼らは悲嘆に暮れて帰っていった。その後、彼らは遠くにある小さなマスジドで金曜礼拝をおこなった。そしてさらに、その呪われし者どもは、城塞の建築を完成させるために、ムスリムの墓を掘り返し、その石材を奪ったのである。

城塞の建築が完了する前に、このザモリンが没し、彼の前述の兄弟が彼の王国を支配することとなり、和平の効力(amr al-ṣulh)が途絶えた。

4) Šāliyāt (Chaliyam). カリカットの10km南でアラビア海に流れ込むチャリヤム川の河口に位置する港市 [Nainar 1942: 73; 大旅行記: 6巻193頁(注216)].

5) 1ファルサフは約6kmに相当する。

6) ユリウス暦1531年12月10日。

そこで、新ザモリンは、チャリヤムの支配者と戦い、その国 (buldān) を荒廃させた。そしてついに、チャリヤムの支配者はザモリンに屈服し、彼らの慣習が規定する条件で彼と和平を結んだ。

この年、アミール・ムスタファー・ルーミー⁷⁾が、モカ (Muḥā) から多数の大砲と資金とともにグジャラートのディウ (Dīw Ġuzarāt) に到来した。マリク・トゥガン・ブン・マリク・アヤース⁸⁾が、スルターン・バハードゥル・シャー⁹⁾の宗主権下で、そこを支配していた。彼が到来した後、フランクがそこを奪取する目的でやって来た。そこで、前述のアミール・ムスタファー・ルーミーは彼らと戦い、巨大な大砲で彼らに対して砲撃した。すると、フランクたちは、神の許しのもと、失意のうちに惨めに怯えながら敗走したのであった。

第6節 ザモリンとフランクの3度目の和平

それは〔9〕40年¹⁰⁾のことであった。ザモリンはフランクとの間で和平を結び、カリカットからアラブの地 (barr al-ʿArab) へ4隻の船を送り出すことの許可などを条件とした。そこで、その年の航海期 (mawsim) に、それらの船はアラブの地へと出航し、彼の臣民たちはフランクの許可証を携えてその他の国々 (buldān) へと出航した。

さて、ザモリンはタヌルの支配者と戦うために出発し、彼と戦って疲

7) al-Amīr Muṣṭafā al-Rūmī. 16世紀前半にインド洋で艦隊を率いて活躍した軍人 Muṣṭafā Bayram であろう。1527年、叔父であるオスマン朝海軍提督 Selmān Re'īs (本訳ではサルマーン・ルーミーと表記 [ジハード戦士の贈り物 (4): 40頁]) によってイエメンのカマラーン島に置かれた艦隊基地の指揮官に任命された。翌年、イエメン本土で叔父が暗殺されると首謀者を処刑したもののイエメンの掌握には失敗した。1529年、ポルトガルの攻撃を受けてハドラマウトのシフルへ逃れたが、1531年に総督 Nuno da Cunha (在任1529-1538年) 麾下のポルトガル艦隊がディウを襲った際には、ディウの救援に駆けつけポルトガル艦隊を駆逐した。本文の記事はこの事件のことであろう。その後、ムスタファーは艦隊とともに現地に留まり、グジャラート王国、次いでムガル朝に仕えた [Casale 2010: 44-48]。

8) al-Malik Tūgan b. Malik Ayās. グジャラート王国の総督として1510年頃から1522年までディウを支配したマリク・アヤースの息子。アヤースの後を継いでディウを支配したイスハークの弟 [ピアスン1984: 107-1189; "Dīū," EI 2]。Tuḥfa/Lは Malik と Mālik としているが、3写本が Malik と綴っており、D写本のみ Mālik と読める [A: f. 22b; B: f. 138b; C: p. 57; D: f. 18b]。

9) al-Sultān Bahādur Šāh. グジャラート王国 (アフマド・シャーヒー朝またはムザッファル・シャーヒー朝) 君主。在位932-943 [1526-1537] 年。

10) ユリウス暦1533年または1534年。

弊させた。そして、両者の間で和平が結ばれ、[58 (152, 154)¹¹⁾] ポンナニの近くにあるタヌル側の土地とチャリヤムにある島をザモリンに譲渡することとなった。コーチンからチャリヤムの城塞を建てるためにやって来たフランクが、両者の和平の調停者となったのである。

この両者の和平成立の直後に、ハージャ・フサイン・サンジャクダール・ルーミー¹²⁾とクンジュ・アリー・マラッカー¹³⁾すなわちファキーフ・アフマド・マラッカー¹⁴⁾の兄弟が、スルターン・バハードゥル・シャーからザモリンへの立派な贈り物を伴って、グラーブ船¹⁵⁾に乗って到来した。彼らはまた、海上でフランクと戦うためにグジャラートへ向けて出発することをマラバルのムスリムたちに求めるために資金を持参していた。しかし、そのことは成就しなかった。彼ら二人がカリカットに入ったのは、[9] 41年3月16日¹⁶⁾のことであった。

第7節 スルターン・バハードゥルシャーによるフランクとの和平および諸港の割譲——神が彼に慈悲をかけんことを——

それは以下の通りである。その年の終わりに、スルターン・フマーユーン・パードシャー・ブン・バーブル・パードシャー¹⁷⁾——神が両者の寝所を照らさんことを——が [59 (151, 153)¹⁸⁾] デリー (Dihlī) とその州 (wilāya) を手に入れた後、グジャラートへ向かい、いくつかの都市を破壊し、バハードゥル・シャー——神が彼に慈悲をかけんことを——は敗走した。彼はフマーユーン・パードシャーを恐れ、援助を求めるためにフランクに使節を送った。そこで彼らは急いで彼の許へ到来し、両者の間で合意と和平が成った。彼は、バサイ¹⁹⁾やマーヒム²⁰⁾などといった

11) PDF版は、この頁が重複している。

12) Ḥawāḡa Ḥusayn Saṅḡaqdār al-Rūmī.

13) Kuṅḡ ‘Alī Marakkār. 「ジハード戦士の贈り物 (5)」 [23頁注39, 40] 参照。

14) Faqīh Aḥmad Marakkār. 「ジハード戦士の贈り物 (5)」 [23頁注39, 40] 参照。

15) グラーブ船 (āgrība): sg. ḡurāb. 軍用船の一種。櫂と帆の両方を用いる [Agius 2008: 348–351]。

16) ユリウス暦1534年9月25日。

17) al-Sulṭān Humāyūn Pādśāh b. Bābur Pādśāh. ムガル朝君主。在位937–947, 962–963 [1530–1540, 1555–1556] 年。

18) PDF版は、この頁が重複している。

19) Wasay (Vasai). ムンバイの北40kmに位置するバサイ川北岸に位置する港市。

自領の諸港のうち幾つかを彼らに与えた。そこで彼らはその諸港を手に入れ、それらの近隣の町と土地を併合した。このことによって彼らには多くの便宜が生じ、彼らの勢力は大きくなった。バハードゥル・シャーはディウを彼らに与え、その防備を固めるよう命じ、そのウシュル税（‘uṣūr）の半分を彼らのものとした。そこで、彼らはディウの防備を固め要塞化したのである。

以前からフランクはディウを手中に収めることを望んでおり、その目的でマリク・アヤースの時代とその子孫たちの時代に何度もそこへ到来していた。しかし、至高なる神の許しのもと、彼らは目的を果たせず、失意のうちに帰還していたのであった。ところが、彼らの意志と至高なる神の意志が一致すると、それは彼らにとって容易になった。さらに、称えられるべき至高なる神は、バハードゥル・シャーの死を彼らの手に委ねた。そこで彼らは彼を殺害し、その遺体は海の中に遺棄された。「我らは神に属し、神へと還りゆく」[クルアーン：2章156節]。神の命令は定められた運命なのであった。彼の殺害は、〔9〕43年9月3日²¹⁾のことであった。スルターン・バハードゥル・シャーが殉死すると、フランクはディウ全体を手に入れ力を得た。以上のことは、比類なき強者にして叡智者の定めなのである²²⁾。神の決定に反対する者はおらず、〔60(150)〕その意図を拒む者もない。

〔9〕44²³⁾年、フランクがパラバンナ²⁴⁾に上陸し、アリー・イブラーヒーム・マラッカール²⁵⁾の父方の従兄弟クッティ・イブラーヒーム・マラッカール²⁶⁾および彼と共にいた者たちを殺害し、その地を焼き払って帰っていった。フランクはタヌルの支配者およびその臣民と和平状態にあり、殺害された人々は、フランクの許可証を携えて航海するタヌルとパラバンナの民であるのだが。その原因は、フランクの許可証を携えずに〔パ

20) Mahā'im (Mahim). ムンバイ旧市街の北 5 km に広がるマーヒム湾に面する港市。
Tuḥfa/Lはこの地名をBahā'imとしているが、3写本がMahā'imと綴っており、
C写本のみBahā'imと読める [A: f. 23b; B: f. 139b; C: p. 58; D: f. 19a]。

21) ユリウス暦1537年2月13日。

22) 『クルアーン』6章96節に類似の一節がある。

23) ユリウス暦1537年または1538年。

24) Parwanūr (Paravanna). タヌルの南 8 km に位置する港市。Cf. Logan 1887: 77.

25) 'Alī Ibrāhīm Marakkār.

26) Kuttī Ibrāhīm Marakkār.

ラバンナの] 船が胡椒と生姜を積んでジッダ港 (Bandar Ġudda) へ航行したことにある。フランクにとっての関心事の一つは、胡椒と生姜を積んで特にジッダ港へ航行することなのであるから。

ザモリンは、フランクおよびコーチンの支配者と戦うために、クランガノール²⁷⁾ へ向けて出発した。数日間にわたって戦いがおこなわれた後、神が彼らに対する恐怖をザモリンの心に抱かせたので、彼は何も得ることなく帰還した。その後、フランクはそこに城塞を建てた。それは、ザモリンにとって彼らに対する大きな障碍となった。

また、アリー・イブラーヒーム・マラッカールとファキーフ・アフマド・マラッカール、彼の兄弟クンジュ・アリー・マラッカール——神が彼らに慈悲をかけんことを——が42隻のグラープ船団を率いてカヤルパティナム²⁸⁾ 方面に向けて出発した。彼らはバイターラ²⁹⁾ に到着して上陸し、そこにグラープ船を置いて数日間とどまり、墮落してしまった。そのとき、神の裁定と定めによって、フランクがグラープ船で到来して戦い、ムスリムたちが伴っていたグラープ船をすべて奪った。殉教する者が出た。このグラープ船団の奪取は、〔9〕44年8月末日³⁰⁾ のことであった。生き残った者はバイターラから出てマラバルへ向かった。途中、彼らがナレピリー³¹⁾ に到着した時、アリー・〔61 (149)〕イブラーヒーム・マラッカール——神が彼に広大な慈悲をかけんことを——が没した。

同年10月半ば³²⁾、フランク——神が彼らを滅ぼさんことを——が、カ

27) Kudungallūr (Cranganur). マラバル海岸中部、コーチンの北40kmに位置する港市。

28) Qā'il (Kayalpattinam). コモリン岬の北東100kmにある港市。

29) Baytāla. 不詳。Nainarは“cannot be identified”としている [Tuhfa_trans/N1: 95]。Tuhfa_trans/N2は、訳文でこの地名をPuttalamと表記し、カヤルパティナムの南方の地名であると注記している [Tuhfa_trans/N2: 73, 129 (n. 6)]。この名の港市がスリランカ西岸に存在するが、本文で言及されている地名と同定するには情報が乏しい。

30) ユリウス暦1538年1月31日。

31) Nallānpaz. (Nalleppilly). NainarはNallānballīと転写している [Tuhfa_trans/N1: 74]。Tuhfa_trans/N2は、訳文でこの地名をNallambillyと表記し、旧コーチン国内のNalleppillyであると注記している [Tuhfa_trans/N2: 73, 129 (n. 7)]。この地名はケーララ州中部のPalakkad県にあり、内陸に位置している。船を奪われたマラッカール家の一行は、陸路でマラバルへ向かったということであろうか。

32) ユリウス暦1538年3月半ば。

ナノール³³⁾の沖でカッパト³⁴⁾の民のグラブ船を奪った。

第8節 スライマーン・パシャのディウおよび周辺地域³⁵⁾への到来

その年、前述のスルターン・スライマーン・シャー³⁶⁾のワズィールであるスライマーン・パシャ³⁷⁾は、見事かつ完璧な装備で、グラブ船とバルシャ船³⁸⁾など約100隻の船隊を率いてアデン港 (Bandar 'Adan) へ到来し、そのスルターンであるシャイフ・アーミル・ブン・ダーウード³⁹⁾——神が彼に慈悲をかけんことを——を、そこの有力者たちの一部とともに殺害し、そこを手中に収めた。その後、彼はグジャラートに到来し、ディウとの戦いを開始して、その城塞の大半をスルターンの巨大な大砲で破壊した。しかし、神がフランクに対する恐怖をスライマーン・パシャの心に抱かせたので、彼は征服することなくエジプト (Miṣr) へ、ついでオスマン帝国本土 (al-Rūm) へと帰還した。それは、誉れ高き神が、彼の僕たちに対する試練として運命づけたことであった。その後、フランクは城塞の破壊された部分を修復し、極めて完璧に城塞の防備を強化した。

アリー・イブラーヒーム・マラッカール——神が彼に慈悲をかけんことを——が没してから1年後、ファキーフ・アフマド・マラッカールと彼の兄弟クンジュ・アリー・マラッカールが、11隻のグラブ船を率い

33) Kannanūr (Cannanore), カリカットの北西80kmに位置する港市。Cf. Logan 1887, v. 1: 70.

34) Kāpkāt (Kappatt), カリカットの10km余り北西に位置する港市。

35) 周辺地域: nawāhī-hā.

36) al-Sulṭān Sulaymān Ṣāh. オスマン朝スルタン=スレイマン1世。在位926-974/1520-1566年。

37) Sulaymān Bāša. オスマン朝の軍人、行政官。スレイマン1世の下で2度にわたってエジプト総督を務めた (931-941 [1525-1535], 943-945 [1536-1538] 年)。のちに大宰相となる (948-951 [1541-1544] 年)。954 [1547] 年没 [“*Khādīm Süleymān Pasha*,” EI 2]。スライマーン・パシャが遂行した紅海・インド洋遠征については、Casaleによる詳述と考察のほか、アンドレ・クローによる概要紹介がある [Casale 2010: 59-65; クロー1992: 255-258頁]。

38) バルシャ船 (baršāt): sg. barša. 帆樫両用の船。ガリオット船 (galliot) [Agius 2008: 330]。なお、*Tuḥfa*/LおよびA・D写本はbaršānと綴るが、B・C写本に従って読んだ [A: f. 24b; B: f. 140b; C: p. 61; D: f. 19b]。

39) al-Šayḥ 'Āmir b. Dāwūd. ターヒル朝の王族。923 [1517] 年のマムルーク朝によるイエメン征服の後も存続していたターヒル朝残存勢力の一人 [NID: 110]。

てセイロン（Silān）へ向けて出発した。すると、彼らのところへフランクが到来して戦いとなり、二人が率いていたグラブ船を奪った。殉教した者が出た。生き残った者は、上述の二人の指導者とともに、セイロンの支配者の許へと逃げ出した。しかし、彼は二人を暗殺したのであった⁴⁰。「我らは神に属し、神へと還りゆく」〔クルアーン：2章156節〕。[62(148)]

第9節 ザモリンとフランクの4度目の和平

それは以下の通りである。フランクが和平のためにザモリンの許へやって来た。そこで彼は彼らと和平を結んだ。当時、ザモリンはボンナニにおり、タヌルの支配者とクランガノールの支配者がこの和平締結に同席し尽力していたのである。この和平締結は、〔9〕46年8月⁴¹のことであった。そして、ザモリンの臣民は、フランクの許可証⁴²を携えて航海を始めた。

〔9〕52年、聖なる1月の8日⁴³、カナノールにおける有力な指導者（al-muqaddam al-kabīr）であるアブー・バクル・アリー⁴⁴とその義理の兄弟クンジュ・スーフイー⁴⁵をフランクが殺害した。前者はアリー・アーズィラージャー⁴⁶の母方の叔父で、後者は彼の父である。神が両者に慈悲をかけんことを。数日の間、フランクとカナノールの人々の間に反目が生じたが、やがて彼らは和解した。

40) 以上の叙述に現れるセイロンの支配者とは、南西部を拠点としていたコーッテ国の王であろう。1506年にポルトガルがスリランカへ来航して以来、コーッテ国はポルトガルと友好関係にあり、1520年代以降はとくにその軍勢力への依存を高めていた〔「コーッテ王国」『南アジアを知る事典』；Biedermann 2014: 36, 46-47〕。

41) ユリウス暦1539年12月または1540年1月。

42) 許可証（ruq'āt）：sg. ruq'a. ポルトガル側が発給した航海許可証。本文の他の箇所ではwaraqaと呼ばれている。

43) ユリウス暦1545年3月22日。

44) Abū Bakr 'Alī.

45) Kuṅṅ Sūfī.

46) 'Alī Ādirāgā.

第10節 ザモリンとフランクの対立発生

その原因は以下の通りである。〔9〕57年1月1日⁴⁷⁾ ザモリンとマラバルの支配者の一人との間に合意が成立した。後者は、コーチンのもつとも有力な盟友 (mu'in) であり、その王国はコーチンの南側に近接していた。フランクは彼を胡椒の主⁴⁸⁾と呼んでいた。というのも、彼の国から胡椒が大量に輸出されるからである。胡椒の主は、〔63 (147)〕ザモリンの盟友集団の一員となった。彼は王国をザモリンに差し出したうえで、自分の兄弟を〔継承順位〕4番目とするようザモリンに求めた。つまり彼の兄弟は、当代のザモリンが没し、さらにその後継者が二人没した後にザモリンになるというわけである。そこでザモリンは、彼の兄弟を〔継承順位〕4番目としたが、それは以前よりマラバルの民の慣習の一つであった。

胡椒の主が彼の国へ帰ると、そこへコーチンの支配者とフランクが彼と戦うために到来し、戦争となった。その結果、胡椒の主は焼死してしまった。それは、同年5月⁴⁹⁾のことであった。彼が死亡したという知らせが届くと、ザモリンは躊躇することなく彼らと戦うためにカリカットを出発した。彼は胡椒の主の国に至り、フランクとコーチンの支配者を相手に戦った。彼は多くの財貨を費やしたが、損益なく帰還した。

同年6月8日⁵⁰⁾、胡椒の主の軍団の大集団が、川によって隔てられているのをものともせず、コーチンへと侵入し、多くの家屋を焼き払った。この事件によって、コーチンの民に甚大な被害が出た。その軍団は、自分たちの支配者がコーチンの支配者とフランクに対する戦いで死んでしまったことゆえに、まさにこのような行為に及んだのである。神が比類なき強者と権能者の一掴みで彼らを掴まんと⁵¹⁾。

このような理由でザモリンとフランクの間に対立が生じた。そして彼

47) ユリウス暦1550年1月20日。

48) 胡椒の主 (ṣāhib al-filfil) : Nainarは、この人物をVatakkenkūrのラージャであると注記している [Tuḥfa_trans/N1:77 (n. 24)]。

49) ユリウス暦1550年5月または6月。

50) ユリウス暦1550年6月24日。

51) 『クルアーン』54章42節にある「我らは比類なき強者と権能者の一掴みで彼らを掴んだ」という一節を踏まえた表現。

らはゴア (Kūwah) から [64 (144)] 重厚な装備で出発し、スイッコディ⁵²⁾ に上陸して、その家屋と店舗の大半とそこにあったマスジド・ジャーミイ (al-masǧid al-ǧāmi') を焼き払った。それは、前述の年の10月14日⁵³⁾ 土曜の朝のことであった。その翌日、彼らはファンダライナ⁵⁴⁾ に上陸し、その家屋と店舗の大半とマラバルで最初に建てられたジャーミイを焼き払った。その後、木曜の朝に彼らはボンナニに上陸し、その家屋の大半とそこにあった大ジャーミイ (al-ǧāmi' al-kabīr) を含む四つのマスジドを焼き払った。この3国のいずれにおいても、一群の人々が殉教した。

[9] 60年6月末日⁵⁵⁾、ライース・アリー・ルーミー⁵⁶⁾ がキラカライ⁵⁷⁾ 沖におけるフランクとの戦いで殉教し、彼が率いていたグラープ船がフランクの手に落ちたという知らせが届いた。神が彼らをアード族とサムード族⁵⁸⁾ のように滅ぼさんことを。「我らは神に属し、神へと還りゆく」[クルアーン：2章156節]。「それは、比類なき強者にして全知者の定めなのである」[クルアーン：6章96節]。それ以前に、アリー・ルーミーは、フランクの船を何隻か奪い、カヤルパティナムの近くにあつてフランクが住んでいた村であるブンナイカヤル⁵⁹⁾ に上陸し、そのフランクと戦って彼らをうち負かし、その村を荒らしたのであった。

[9] 60年7月⁶⁰⁾、航海期外 (ǧayr al-mawsim) に、ユースフ・トゥルキー⁶¹⁾ が、モルディブ (Dīw Maḥal) に住んでいるフランクから奪った大きな大砲を伴って、そこからボンナニへ到来した。

52) Tirkūdī (Trikkodi/Thikkodi). カリカットの北西30kmに位置する港市。Cf. Logan 1887: 72.

53) ユリウス暦1550年10月26日。

54) Fandarayna/Fandarīna. マラバル海岸北部、カナノールとカリカットの間に存在した港市。正確な位置は不明 [Nainar 1942: 34-35; 大旅行記：6巻176-177頁 (注138)]。

55) ユリウス暦1553年6月12日。

56) al-Ra'īs 'Alī al-Rūmī.

57) Kirkir (Kilakarai/Keelakarai). タミル・ナドゥ州南部マンナール湾北部に面する港市。

58) 'Ād wa Tamūd. いずれも、神に従わずに滅ぼされたとされる古代アラビアの民族。

59) Funna Qā'il (Punnaikayal). タミル・ナドゥ州南部、カヤルパティナムの北7kmに位置する港市。

60) ユリウス暦1553年6月または7月。

61) Yūsuf al-Turkī.

文献および略称

『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』テキスト・翻訳

〈写本〉

Ms. 2799. British Library. (India Office旧蔵 Loth 1877: no. 714) [A (A写本)]

Ms. 2807. British Library. (India Office旧蔵 Loth 1877: no. 1044-V) [B (B写本)]

Ms. Arabic 28. Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. (Morley 1854: no. IV) [C (C写本)]

Ms. Add. 22375. British Library (British Museum旧蔵 Cureton 1846 – 71: no. 945) [D (D写本)]

〈刊本〉

Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim. Ed. and trans. David Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898. [*Tuḥfa/L*]

Tuḥfat al-muḡāhidīn fī ba‘d aḥbār al-Purtukāliyyīn. Ed. al-Ḥakīm al-Sayyid Šams Allāh al-Qādirī. Ḥaydarābād: Maṭba‘ al-Tārīḥ, [1931]. [*Tuḥfa/Q*]

Tuḥfat al-muḡāhidīn fī aḥwāl al-Burtuḡāliyyīn. Ed. Muḥammad al-Sa‘īd al-Ṭarīḥī. Bayrūt: Mu‘assasat al-Wafā’, 1985. [*Tuḥfa/T*]

〈翻訳〉

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（1）』『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』15号、2016年：87–97頁。[ジハード戦士の贈り物（1）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（2）』『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』16号、2017年：33–54頁。[ジハード戦士の贈り物（2）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（3）』『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』17号、2018年：33–42頁。[ジハード戦士の贈り物（3）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（4）』『京都女子大

学大学院文学研究科研究紀要史学編』18号、2019年：27-46頁。〔ジハード戦士の贈り物（4）〕

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 訳注（5）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』19号、2020年：17-29頁。〔ジハード戦士の贈り物（5）〕

Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim. Ed. and trans. David Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898. [*Tuhfa_trans/L*]

Tuhfat-al-mujāhidīn: an Historical Work in the Arabic Language. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. Madras: University of Madras, 1942. [*Tuhfa_trans/N1*]

Tuhfat al-mujāhidīn: a Historical Epic of the Sixteenth Century. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. [Eds. P. K. Koya Kutty and A. I. Vilayathullah] Kuala Lumpur: Islamic Book Trust, 2006. [*Tuhfa_trans/N2*]

Tohfut-ul-Mujahideen: an Historical Work in the Arabic Language. Trans. M. J. Rowlandson. London: Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland, 1833. [*Tuhfa_trans/R*]

辞典・目録類

辛島昇他監修『南アジアを知る事典』新訂増補、平凡社、2002年。〔南アジアを知る事典〕

Bosworth, Clifford Edmund. *The New Islamic Dynasties*. 1996. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2004. [NID]

Cureton, William, and Charles Rieu. *Catalogus codicum manuscriptorum orientalium qui in Museo Britannico asservantur*. Pars 2. Londini: Impensis Curatorum Musei Britannici, 1846-71. 3 vols in 1 vol. Hildesheim: Georg Olms, 1998. [Cureton 1846-71]

Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al., eds. *The Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960-2009. [EI 2]

Loth, Otto. *A Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Library of the India Office*. London, 1877. [Loth 1877]

Morley, William Hook. *A Descriptive Catalogue of the Historical Manuscripts*

in the Arabic and Persian Languages, Preserved in the Library of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. London, 1854.
[Morley 1854]

史料・史料訳注

- 『コーラン』藤本勝次ほか訳. 全2冊、中央公論新社〈中公クラシックス〉、2002年。
『日亜対訳・注解 聖クルアーン』[三田了一訳]、改訂版、日本ムスリム協会、1982年。
イブン・バットゥータ『大旅行記』イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注、全8巻、平凡社〈東洋文庫〉、1996-2002年。[大旅行記]

研究

- クロー、アンドレ『スレイマン大帝とその時代』濱田正美訳、法政大学出版局〈くりぶらりあ選書〉、1992年。[クロー1992]
谷口淳一「中世南インドのムスリム知識人——ザイン・アッディーン・マアバリー著『ポルトガル人の諸情報におけるジハード戦士の贈り物』に関する覚え書き——」森部豊・橋寺知子 編著『アジアにおける文化システムの展開と交流』関西大学出版部、2012年：231-243頁。[谷口2012]
ピアスン、マイケル・ネイラー『ポルトガルとインド—中世グジャラートの商人と支配者—』生田滋訳、岩波書店〈岩波現代選書〉、1984年。[ピアスン1984]
Agius, Dionisius A. *Classic ships of Islam: from Mesopotamia to the Indian Ocean.* Leiden: Brill, 2008. [Agius 2008]
Biedermann, Zoltán. *The Portuguese in Sri Lanka and South India: Studies in the History of Diplomacy, Empire and Trade, 1500-1650.* Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2014. [Biedermann 2014]
Casale, Giancarlo. *The Ottoman Age of Exploration.* New York: Oxford University Press, 2010. [Casale 2010]
Logan, William. *Malabar Manual.* 2 vols. Madras: The Government Press, 1887. Rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1989. 5th rpt, 2010. [Logan 1887]
Nainar, S. Muhammad Husayn. *Southern India as Known to Arab*

Geographers. New Delhi: Cosmo, 2004. Rpt. of *Arab Geographers' Knowledge of Southern India*. 1942. [Nainar 1942]